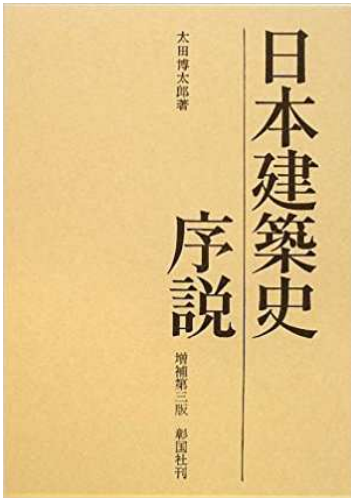


『日本建築史序説』

太田博太郎 著



藤森照信氏いわく、現在の建築学建築学科もさうとう奇妙なことになっている。科目がてんでバラバラ。材料学・構造学・構造力学・環境学・計画学…。いろいろ、たくさん学ぶ必要ははたしてあったのか。設計と歴史の二つをちゃんと身につければなんとかなるのではないか。建築に関心の向いてきた人なら歴史だけで十分だろう。歴史のおかげで、建築をじっくり眺め、深く考えることができるようになった…というこで、建築史で最初に手にする本から。

【I. 日本建築の特質】

◆日本の自然と社会◆ 世界的には温和な自然のために、人々は自然を恐れ自然の暴威におののくことなく、自然を愛し、自然を賛美してきた。

山も川も大規模でなく、海浜・平野・森林・丘陵・山岳は相い交錯して変化ある風景を展開する。しかも四季の変化はこもごも至って、春の桜、秋の紅葉、

夏の深緑、冬の白雪と、いろとりどりの景観をあらわす。このような小規模で変化に富む自然は、日本人の自然に対する感覚を鋭敏にし、雄大なものよりも、優しい洗練されたものを好む。

◆外来文化の受容と伝統の維持◆ 飛鳥奈良時代の六朝・唐の影響、鎌倉時代の宋様式伝来、明治維新後の西欧輸入

◆日本人の建築観◆ 自然のうちの一本の樹木であるかのように、自然の一点景としか考えられていない。大地を踏まえて立つ堂々たる建築ではなくて、いかに自然と調和する建築をつくるかにあった。庭園の美しさ。茶室。

古墳(仁徳陵)の大きさは非常なものであるが、出来上がった形は自然の丘陵と異ならず、人間の力を自然に対して誇示するような表現はない。春夏秋冬と変化の多い日本の気候、四季の景色の移り変りは、日本民族の心を強く自然に引きつけた。住宅において、開放的で、たかだか雨と風とをしのぎうるに止まる。できるだけ自然の空間そのものうちに生活しようとした。建具を取り払ってしまえば、柱と屋根だけが残る日本建築。庭園、土間、縁。

式年遷宮は精神を担う形であり、物は結局精神を表すための手段で、物自体は永久に残し得ないものと観じていた。

◆日本建築の材料と構造◆ 良質のヒノキ、組物、屋根の美しさ。城郭のような大壁造においても、大きな壁面をつくらず、屋根を数多く設けて、壁面を細分化し、壁のもつ重量感をできるだけ減らすようにしている。

◆日本建築の意匠◆ 控えめな表現、水平的な表現。茶室の非対称。茶室・鳥居の無装飾の美。

日により、時により、変えられ、それが座敷飾りの床の間の懸物、活花によって左右される。このような室内意匠の建築は他に見られないことで、日本建築の大きな特質とすることができる。

【II. 日本建築史序説】 ◆古代…竪穴と高床、神社建築、仏教建築、造寺司と木工寮、建築様式の日本化、寝殿造

◆中世…大仏様と重源、禅宗建築、和様、寝殿造から書院造へ

◆近世…城郭建築、書院造、茶室、都市の発展、町家と農家、洋風建築の伝来

【III.IV. 日本建築史の文献】(本の約半分を占める著書目録・論文目録)

「論著目録」・「概説書」から「保存問題」・「史料の探し方」まで掲載。



『日本の近代建築』(上)―幕末・明治編

『日本の近代建築』(下)―大正・昭和編 藤森照信 著

太田博太郎著「日本建築史序説」を読み、感銘を受けた藤森さん。

「日本建築史序説」は江戸時代までで明治以後は触れられていない。

なら、日本<<近代>>建築史序説を書いてやろうと考えた。=>=>=>=>

…以上3冊で昭和20年頃までの日本建築の「通史」。 (黒野晶大)

